

林芙美子と凍れる大地

― 満州宝清への旅 ―

久保卓哉

林芙美子は一九四〇年一月、極寒の満州を旅した。時は満州国康德七年に当り、満州には日本の軍師団、憲兵隊、協和会本部、少年義勇隊、開拓団が展開し、王道楽土を宣揚していた。訪れた町は、安東、新京、牡丹江、佳木斯、宝清、綏芬河で、芙美子は鉄道と飛行機を利用して精力的に廻った。その芙美子の旅程を明らかにし、併せて筆者が宝清に入って知り得た事の幾つかを報告する。

「キーワード」 林芙美子 宝清県 協和会 凍れる大地 満州日日新聞 東京朝日新聞 魯迅



「贈林芙美子先生 協和會寶清縣本部」「足紋」「鏝鏢」の刻印がある純銀製腕輪（林福江氏蔵）

はじめに

平成二十二年八月三十日から九月十日まで、黒龍江省宝清県を最終目的地として旧北満州を訪れた。王道楽土を目指した協和會組織が宝清県にもあり、その宝清県本部が、林芙美子に純銀製の腕輪を贈っていた。腕輪には「贈林芙美子先生 協和會寶清縣本部」と贈り主が刻まれ、品質を保証する「足紋」の刻印があり、

桜の花びらが図案化されている。「足紋」とは「足色紋銀」の略で、銀の含有率が九十九%である事を示す。このような逸品が何故林芙美子に贈られたのか。抑も芙美子は宝清に行ったのか。行つたとすれば、現在の宝清県にその証拠が残っていないか。それを調べる事が目的であった。

否、目的はそれだけではない。芙美子はこの様な腕輪を二つ持っていた。一つはこれで、もう一つは龍が図案化されたものであったと言う。しかも、これらの腕輪には魯迅との関係が付言され

ていた。

この事を、昨年九月、厦門大学で開催された「中日視野下的魯迅“国際学術研討会”で公表した私は、併せて宝清県での調査を宣言していた。この度の調査にはこうした背景もあった。

◇ ◇

宝清について芙美子は、昭和十五年二月五日の『東京朝日新聞』に「新京から牡丹江へ出て、ヂヤムス、ボウチン、スイフンガといふやうな町々へ行った」と書き、この時の旅行記「凍れる大地」を昭和十五年『新女苑』四月号に発表している(1)。また、昭和二十三年には「幕切れ」で「ヂヤムスの向うの、ボーチンと云ふところの自動車隊に」と宝清ほうちんの名を使っている。

以下に、新聞記事と「凍れる大地」に拠りながら、芙美子の瀋陽の旅程を辿る事にする。また、「凍れる大地」の中で、「野天のホームへ降りると月が出てゐた」「澄んだ月夜である」「月が傘を着て青く光つてゐた」「寶清の月夜」と記す、芙美子が見上げたであろう月の形を再現して示す事にする。

芙美子の旅程 東京から安東へ

林芙美子の瀋陽渡航は、芙美子にとって八度目に当る海外渡航であった。一度目は一九三〇年一月の台湾行であり、二度目は同年八月二十日に東京を出て哈爾濱、長春、上海、杭州を回った一人旅で(2)、三度目は一九三一年十一月四日から翌年六月十六

日までの、瀋陽、シベリア鉄道經由、パリ、ロンドン、上海行き。魯迅と会ったのはこの時と前回の一九三〇年の一人旅の時である。四度目は一九三四年の樺太への旅。五度目は一九三六年九月に北京に滞在した二週間での時は北京大学で周作人と会っている。六度目は一九三七年十二月の南京陥落時の従軍、七度目は一九三八年九月の漢口一番乗りの従軍。そして八度目がこの冬の瀋陽への旅である。

因みに、二度目にあたる一九三〇年八月の瀋陽、上海への出発日を二十日と明記したのには理由がある。二〇一〇年七月の事、内山書店(東京神田神保町)内山籬氏より、内山完造宛の書簡の中から林芙美子の手紙が見つかったという報告が届いた。その複写を見ると「只今東京を先月廿日にたちましてハルピンの旅を終り奉天におります」と書かれていた。奉天ヤマトホテルの用箋二枚を使い、日付は一九三〇年九月五日である。そして、新居格の紹介状を携え、上海は初めてで言葉も通じないので「波止場まで、まことに、まことに厚かましいお願いでございますが、おむかへるだけませんでございませうか」と身を屈める様にして内山完造に頼んでいる。新しく見つかったこの手紙は、極めて重要な事を教えてくれる。上海で魯迅と会う事になるこの旅の始まりが八月二十日である事。上海へは大連発の汽船で行った事。そして、新居格の紹介で完造の出迎えを受ける事ができた事等である。芙美子は哈爾濱、長春、撫順、大連、上海、杭州の各地から夫の緑敏に絵葉書を出し

ているが、緑敏以外には完造宛に投函していた事が判った。

この、冬の満洲への旅を『満洲日日新聞』（以下『満日新』と略す）の記事と、『満洲支那汽車時間表』（3）（以下『満時表』と略す）を手掛かりにして辿ってみよう。

芙美子の渡満は一月七日の『満洲日日新聞』（4）で報じられた。

「本當の満洲は冬に見るべし 林芙美子來滿」【關門特電六日發】女流作家林芙美子は正月客のごつた返す六日朝の關釜連絡船に飄然と姿を現し“四十日位の豫定で北滿各地を



『満洲日日新聞』昭和十五年一月七日

ぶらりと歩いて來ます”と語る 大陸景氣といふのか汽車も人も大した人ですね、痛癢を起しさうですよ、満洲はシベリアから歸りにちよつと降りて支那料理を食べた位、その前行つたのは十年前だから話になりません、東京ではこの寒い時満洲に行くのは物好きだ

つて笑はれたのですが、わたしは冬行つてこそ本當の満洲が判るのではないかと考へてゐます、今度は各移民地の生活や嚴寒の国境で働く兵隊さんたちとも生活を一緒にしてその労苦を味はたいと考へてゐます、日程など全くもたず勝手氣まゝに歩く積りです（寫真は林芙美子女史）

続いて、釜山から安東に到着した事も二日後の一月九日の同紙

が報じている。



『満洲日日新聞』昭和十五年一月九日

「林芙美子女史 安東に現はる」女流作家林芙美子氏女史は七日午前十一時二十分着ひかりでひよつこり安東を訪れ舊知の採木公司理事長八木元八氏邸に旅装を解いた、二回の來安で今度は国境方面、開拓義勇軍の活動状況を視察するため來滿したが十年來の交友八木氏を驚かしてゐる邊り放浪記時代の女史そっくりである、二、三日滞在の上北行する豫定（寫真は八木氏と林女史）

新聞が伝える「飄然と姿を現し」、「ひよつこり訪れ」、「八木氏を驚かしてゐる邊り」等の記事は芙美子の面目躍如で、「冬行つてこそ本當の満洲が判るのではないか」と言う芙美子に新聞は驚いている。

『満日新』が「六日朝の関釜連絡船に飄然と姿を現した」と伝えている事からすると、芙美子は、五日の十一時〇分に東京を出発して、六日の九時〇分に下関に着く寝台急行三号に乗った事になる。この汽車は下関で十時三十分發釜山行き関釜連絡船に接続する、言わば満洲直行列車であった（『満時表』）。そして、「七日午前十一時二十分着ひかりでひよつこり」という記事からすると、芙美子は一月六日十八時〇分に釜山港に着き、釜山發十九時〇分の新京行き急行ひかりに乗った事になる。ひかりは一、二、

三等と食堂、寝台がある急行で、朝満国境の安東には翌一月七日の午前十一時二十分に着く(『満時報』)。

『満日新』は、安東の八木元八氏邸に旅装を解いたと伝え、写真を添えている。八木元八の事は「凍れる大地」に詳しく書かれている。

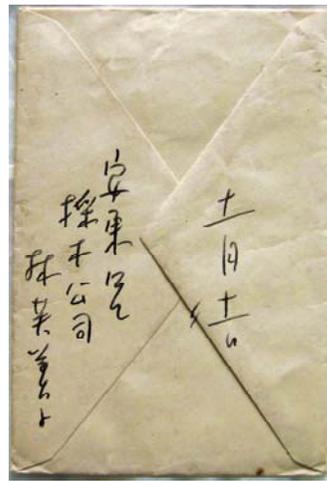
八木氏はもう十年近くも安東あんとうの採木公司さいぼくごんすの理事をしてられる方である。巴里で貧しい學生々活をしてゐるころ、私は安東の八木氏に何度か送金してもらつた私の恩人でもあり、今度の満洲旅行の途中では、こゝへ二三日泊めてもらふことが私の第一の愉しみであつた。

八木氏を私が知つたのは、八木氏がハルビンの領事をしてをられる頃であつた。新京がまだ長春と云つてゐる頃、昭和三年の夏から秋にかけて、私は満洲を旅行した事があつた。(6)

あれから十年たつた現在も八木さんは元気で私を迎へて下さつた。外交官らしく何時も洒落た背廣姿であつた八木さんも、このごろは役所へ出られるのに協和服を着てをられる。

私は安東へ着いてもほとんど外出しないでゐた。八木さんが關係してゐられる製材所と製紙會社を觀に行つたきりで、毎晩、八木氏の御家族とペーチカをかこんで、八木氏から支那の話聞いた。私はこの八木さんの年齢をはつきりとは知らないのだけれども、もう六十歳近くにはなられるであらう。

芙美子は十年前にも八木邸に泊まったと記しているが、一九三〇年のパリへの途次、安東から緑敏に出した手紙が新宿歴史博物館



安東採木公司からの手紙 (新宿歴史博物館蔵)

にある。その封筒の裏には「十一月十一日 安東にて 採木公司 林芙美子」とあり、紀

伊國屋二百字綠色原稿用箋二枚を使って「八木さんのところへ来てます。…これからお嬢さんたちと支那街へ行って支那料理たべます」と書かれている。

その八木元八が、隨筆集『舊雨』(東峰書房)を出したのは、芙美子に勧められたからであつた。八木の隨筆集は、翌一九四一年五月に出ている。(7)

東京から安東までの旅程は次の様なものとなる。

一月五日(金)

十一月〇分 東京発。下関行き急行七号

一月六日(土)

九時〇分 下関着

十時三十分 下関港発。関釜連絡船

十八時〇分 釜山港着

一九時〇分 釜山発。新京行き急行一号「ひかり」
一月七日（日）

十一時二十分 安東着

安東から新京へ

「二、三日滞在の上北行する予定」（『満日新』）と報道された通り、芙美子は「凍れる大地」で次の様に書く。

私は此採木会社の官舎に三日ほど泊めてもらった。

十日の正午、私が乗つて来た「ひかり」で私は安東を發つた。相變らず汽車は満員である。

新京へ着いた時は、息も出来ないほど寒くて、暖いなかに粉雪が降つてゐた。新しく大きい驛である。天井が高いのでホームにまで雪が降つてゐた。

これを『満時表』によると、汽車の時刻は次の様になる。

一月十日（水）

十一時五十分 安東発。新京行き急行一号ひかり

二十一時四十五分 新京着

新京の三日間

新京では、満州新聞の記者四、五人と朝日新聞の渡邊正男に出迎えられ、十日の夜は渡邊の家に泊まった。家の様子を芙美子は

ありありと書いている。

新京へ来た最初の晩を、かうした家庭へ泊めて貰へることは嬉しい事であつた。部屋にはゴムの木の鉢植ゑや、ゼラニウムの鉢が窓に置いてあつた。スチームは暖いし、夜がふけるのも忘れて渡邊さん御夫婦と私は話しあつた。床の間には小さい電氣蓄音機が置いてある。私がお嬢ちゃんへ送つた人形も飾つてあつた。渡邊さんとは漢口まで一緒に稲葉部隊へ従軍して行つたのだけれども、あの時からもう一年になる。

渡邊は、漢口一番乗りの時に一緒に行動したあの渡邊で、この時は新京に赴任していた。

十一日からは日本橋通りのDホテルという日本旅館に部屋を取るが、ホテルの熱いスチームと乾燥した空気のために、芙美子は咽喉を痛めてしまう。

朝七時に目が覺めた。頭がづきづきして、咽喉が乾いて聲が出ない。あーあーあーと、私は自分の聲をためしてみたが、聲は濁つてゐる。

十二日の朝食を済ませると、芙美子は防寒着を買いに出掛けた。私は朝食を済まして、近くの秋林チクリンと云ふ小さいデパートデパートに毛皮シユールを買ひに出掛けた。このお店は露西亞人の店で、割合信用の出来る店だと云ふので、私はこゝでフェルトの防寒靴や、踏下や、毛皮だの防寒帽子を買つた。



“凍れる大地”の防寒着（『東京朝日新聞』昭和15年2月13日）

一月十日（水） 新京。朝日新聞記者渡邊正男宅泊
一月十一日（木） 新京。日本橋通り、Dホテル泊
一月十二日（金） 新京。日本橋取り、Dホテル泊

新京から牡丹江へ

芙美子が新京で買った汽車の切符は、哈爾濱より遠い牡丹江の、更に北の佳木斯ジャムスまでの切符であった。

防寒具もとのひ、私は新京から佳木斯ジャムスまでの二等の切符も買った。切符は二十七圓八十四錢であった。何も彼も用意はととのつてゐる。私は小さいトランクに必要なものだけを詰めて、大きいスーツケースは渡邊さんのお宅へあづけて行くことにした。
フエルトの新しい防寒靴も、私は疊の上ではいてみた。ホツクが六ツもついてゐる。旅仕度をそろへながら、私は子

供のやうに防寒靴を何時までも疊の上ではいてゐた。いよいよ極寒の地奥深くへ入る。芙美子は緊張と期待で気が昂揚していた。

翌十三日の汽車は牡丹江まで二十時間の長旅であったが、芙美子一人ではなく、朝日新聞伝書鳩班五人と一緒にだった。

夜、十一時四十五分發の汽車で、私は朝日新聞の傳書鳩班の人達と牡丹江まで一緒に行くことになった。傳書鳩係りの松田さんと、若い連絡員の人達三人、それに満人のボーイ一人、いい道連れが出来たので嬉しかった。

芙美子は列車の中の退屈な食事を予想して、ピロシキという肉の入った揚げパンを三十箇も買い込んだ。しかし芙美子は寝台券を取っていなかった。切符売場に行くがもう買えない。しかも乗り遅れそうになり、地下道を越した向こう側のホームまで走り走って飛び乗った。寝台券は朝日の連絡員の一つゆずって貰うことができた。

汽車は朝八時過ぎに哈爾濱を出ると、更に十二時間かかって夜牡丹江に着いた。



一九四〇年一月十四日
日夜八時の月。

一面坡を過ぎて、石道河子せきだうかし、横道河子わうだうかし、海林かいりんと云ふ驛を通じて、牡丹江へ着いたのは夜八時頃であった。長い汽車旅に飽いてゐたので、牡丹江へ汽車が停つた時は、はるばると旅をした感じがして嬉しくて仕方がなかった。
野天のホームへ降りると、月が

出てゐた。

二三分もしてくると、頬には、針でさすやうな寒氣を感じた。ホームには、朝日の記者の方が迎へに来てをられた。

私は鳩班の方達と別れて、驛前の富士屋ホテルと云ふのに案内をして貰つた。

一月十三日(土)

二十三時四十五分 新京発。牡丹江行き九〇三号。朝

日の伝書鳩班同行

一月十四日(日)

二十時〇分 牡丹江着。富士屋ホテル泊

一月十五日(月)

牡丹江。郊外の軍隊を訪問。前田少将に

会う

牡丹江から佳木斯へ

次の目的地は佳木斯である。佳木斯までは再び朝日の松田さんと一緒だった。

私は牡丹江へ一泊して、翌る早朝に佳木斯行きの列車に乗った。松田さんと佳木斯まで一緒であつた。

開拓村や、青少年義勇軍で有名な勃利の驛へ着いたのは四時頃であつたらう。

勃利を過ぎて、杏樹、倭肯、千振、八虎力と小さい驛々を

過ぎて、彌榮の驛へは六時頃着いた。小さい驛路である。

佳木斯に着いたのは夜であつた。駅には朝日新聞の記者が車で出て迎えていた。澄んだ月夜の下を車で伊勢屋旅館に向かった。

佳木斯の驛へ着いたのは九時頃であつた。牡丹江で風邪をひいたのか、非常に頭が痛いし、段々聲がかすれてきてゐる。

ホームには朝日の鈴木さんが迎へにみえてゐた。茶色の皮のシュー

パを着て背の高い鈴木さんは、私達の爲に自動車を留意して待つてゐて

下すつた。澄んだ月夜である。

私は伊勢屋と云ふ旅館に宿をとつた。



一九四〇年一月十六

日夜九時の月。

私は伊勢屋と云ふ旅館に宿をとつた。

英美子は、早朝牡丹江発、勃利午後四時着、弥榮午後六時着、佳木斯夜九時着の列車に乗つたと書いているが、『満時表』に見える列車のうちこの時間帯を走るのは、図們発佳木斯行きの一〇三号で、朝鮮半島北部の図們から北に向かい、牡丹江から更に北上して佳木斯に到る。この列車は、牡丹江八時十五分着、八時四十五分発、勃利午後三時発、弥榮午後六時発、佳木斯午後七時三十五分着である。佳木斯に近い弥榮に着いたのは定刻の午後六時だったが、佳木斯には一時間半ほど遅れて着いたという事である。

一月十六日(火)

八時四十五分

牡丹江発。佳木斯行き一〇三号。朝日の松田同行

二十一時頃

佳木斯着。伊勢屋泊

零下十七度の佳木斯

佳木斯は零下十七度だった。氷結した松花江が生彩を放ち、芙美子は佳木斯を非常に好きだと思った。街には日曜日かと思うほど沢山の兵隊が歩いていた。

今日は一月十七日。零下十七度。

佳木斯と云ふ處は殺風景な土地だときいてゐたけれど、如何にも東部の満洲町らしくて私には好ましい處であつた。兵隊さんが澤山街に溢れてゐる。私は日曜日かしらと思つた。

私は佳木斯の街が非常に好きだ。第一、氷結した松花江が生彩を加へてゐる。

佳木斯で頭痛に悩まされた芙美子は、アスピリンを飲んで翌日からの宝清行きに備えた。いよいよ最終目的地の宝清に行くという氣持であつた。

アスピリンが一粒あつたのでそれを飲んで床へはいつた。

明日はいよいよ寶清行きである。

一月十七日(水)

零下十七度。伊勢屋泊

佳木斯から宝清へ

宝清へは鉄道が無く、陸路か空路で行く必要があつた。空路には満州航空の定期便があり一時間の飛行で宝清に着く。芙美子は朝日の鈴木に同行してもらつた。

翌朝、朝七時に、私は鈴木さんと飛行場へバスで行つた。

九時離陸、飛行機は何型と云ふのか、四人乗りの小さい飛行機で、乗客は鈴木さんと私と、陸軍の將校の方が一人。

寶清まで約四十五分ださうである。

二十分位すると、私の頭は破れるやうに痛みはじめ、防寒靴をはいている兩脚が、まるで魚をぶらさげてゐるやうに重くだるくなつてきた。

手袋を二つしてゐるのに手の先がづきづき痛くなつて來た。

十時頃、飛行機は寶清の飛行場へ着いた。

すさまじいエンジンの音をさせて飛ぶ四人乗りの飛行機の中で、頭痛と手足の寒さに耐えながら芙美子は遂に宝清に着いた。宝清飛行場には赤木少佐が迎えに來ていた。

一月十八日(木)

七時 佳木斯飛行場へ。朝日の鈴木同行

九時 佳木斯離陸。満州航空の四人乗りの小型飛行機

機

十時 宝清飛行場着陸。赤木少佐が出迎え

宝清での林芙美子

宝清に着くと芙美子は氷点下二十七度の中を精力的に動き廻った。宝清では協和会主催の座談会に招かれていて、協和会事務所を訪問してから、座談会が開かれる料亭に行った。そこで座談会を済ませると、今度は陸軍病院に移動して傷病兵を前にして慰問の講演をした。昼食は丘の上の兵舎で、十二三人の将校と卓を囲み、夕食は赤木少佐の官舎で、木下少将や四手井大佐たち六名と共にご飯を食べた。夕食では食事半ばで中座し、再び協和会主催の座談会に出席し、帰ると夜の九時になっていた。

右が芙美子の行動の概略だが、芙美子の言葉でそれを追ってみよう。一月十八日、一日の事である。

〈兵舎で昼食〉

寶清の温度は零下二十七度だった。

一時間ほど休んで、私は鈴木さんと兵舎へ行つた。丁度晝食時だったので、私は木下少将と御一緒の卓子テーブルで御飯の御馳走になった。十二三人の將校の方々と粗朴な卓子を圍んで代用食のお蕎麦をいただく。

〈陸軍病院〉

兵舎を出て、私は陸軍病院に鹽加井中佐をおたづねして、咽喉へリゴールを塗つて戴く事をお願いしてみた。咽喉が痛いし、頭が破れるやうに痛む。

〈協和会主催の座談会〉

病院を出て、私は協和會主催の町の座談會へ行く。町と云つても聚落のやうな土塀に圍まれた片田舎の町である。兵舎から四五キロ離れてゐた。

協和會の事務所に寄つて、それから路地の奥の「鷹亭」と云ふ日本料理屋へ案内をされた。

私は何を話していつのか困つてしまつた。

私のそばには五六人の協和會の方方が坐つてをられた。

〈陸軍病院で講演〉

鷹亭の座談會を済ませて、私は再び陸軍病院に行つた。傷病兵の方方へ講演をしなければならぬのだけれど、薄暗い廣間に白衣で坐つてゐる兵士の方々を見ると私は胸がいつばいになつてしまつた。

〈夕食 赤木少佐の官舎〉

夕食は、赤木さんの官舎で、奥様のお手料理を御馳走になつた。咽喉はますます痛い。木下少将、四手井大佐、鹽加井中佐、春山中佐、山田少佐、これだけの方々と御一緒で御飯を食べたのは愉快かつた。

食事なかばで、私はまた協和會の方々の町の座談會へ出席しなければならなかつた。

〈月夜の青い光〉

流石に疲れてへとへとである。寒い月夜の道を、兵隊さんが自動車を運轉して下さるのだけれど濟まないと云つた。



一九四〇年一月十八
日夜八時の月。

月が傘を着て青く光つてゐた。

〈協和会主催の町の座談会〉

座談會場は、鷹亭の前の旅館の廣間で、もう町の有志の方々が大分あつまつてゐた。

協和會の人達だの、郵便局の方、憲兵隊の方々、女事務員の人達が、壁ぎはに並んでゐられた。

寶清の歴史や地勢を熱心に話して下さる方があり、私は非常に嬉しかった。寶清の發展も、軍隊が這入つてから急速に整つて來たらしく、かうした邊土に現在は協和會の事務所もあるのだ。

〈夜九時官舎へ戻る〉

官舎へ戻つたのは九時頃であつた。

歸つてすぐお風呂をよばれた。私が風邪を引いてゐるので、あたゝまるやうにと、蜜柑の皮が袋に入れて浮かしてあつた。蜜柑の香りがしていゝお風呂である。水も綺麗だった。風呂からあがつて、熱いお番茶をいたゞいた。もう十時が來たのか、電氣がせはしく明滅しはじめてゐる。

〈お月様〉

奥さまお手製のおいしい羊かんもよばれた。アンデルヒン



一九四〇年一月十八
日夜十一時の月。

の月のやうに、お月様がこの家うちをのぞいてゐたら、隨分、愉しさうだなとお思ひになるだらう……。

官舎の庭を照してゐる。

寶清の月夜の官舎は生涯忘れることが出來ない。

一月十八日(木) 零下二十七度

午後 兵舎で昼食

陸軍病院。咽喉にリゴールを塗ってもらう

協和会事務所に寄る

協和会主催の座談会。日本料理の鷹亭にて

陸軍病院。傷病兵に講演

赤木少佐の官舎で夕食会

協和会 町の座談会。鷹亭の前の旅館にて

二十一時 官舎に戻る。入浴

二十二時 風呂から上がる

二十三時 寢床に入る。赤木少佐の官舎泊

宝清から佳木斯へ

風邪を押して多くの人と接して廻った芙美子の行動力には頭が下がる。宝清での一日は充実した一日だったに違いない。軍人、憲兵、協和会、郵便局、女事務員、軍医、傷病兵など多くの人と接する事が出来たからである。そのせいか翌朝の芙美子は声がつぶれていた。十九日の朝は飛行機に乗って佳木斯に戻る日だった。芙美子は下着を六枚、靴下を三枚、ジャケツにウールの服を着、その上に更に厚い毛皮のコートを着込んで飛行機に乗った。飛行機はものすごく揺れながらも一時間余りで佳木斯に着いた。

朝、私は眼を覺ましたけれど、左の眼の上に、黒い煤煙がちらちらして不快だった。聲もすつかりつぶれてしまつてゐる。

鈴木さんと朝食を御馳走になつて、すぐ飛行場へ行つたけれど、曇天で風がある。

飛行機に乗つた時はメリヤスだの絹だの、私は下着を六枚も着込んで、ジャケツにウールの服、それに厚いシユーバさへも着てゐて沓下は三枚、長い股引まではいてゐてとても寒いのだ。乗客は御用商人のひとが一人私は後尾の椅子へ腰をかけてゐた。飛行士は昨日のひとであった。

離陸して間もなく、窓外には粉雪が降り始めてゐた。飛行機はものすごくゆれてゐる。

やがて私の防寒帽子のひさしに、樹氷のやうな細いつララが咲きはじめてきた。私の息がツララになつて凍つてゐるのだ。

一時間十五分で遠く佳木斯が見えはじめる。

芙美子が乗つた満州航空の飛行機は、『満時表』によると、午前十時四十分宝清飛行場発、十一時五十分佳木斯飛行場の定期便である事が判る。佳木斯に着くと朝日の鈴木夫妻が住む大陸ホテルに旅装を解いた。

一月十九日(金)

十時四十分

宝清飛行場離陸

十一時五十分

佳木斯飛行場着陸。大陸ホテル泊

佳木斯、追分、弥栄、牡丹江、綏芬河

佳木斯に戻つた芙美子は、その後、佳木斯の開拓団、追分の少年義勇隊、弥栄村を見て廻つた。そのあとは佳木斯から牡丹江に南下し、牡丹江から更に東へ百九十三キロ行つたロシアとの国境にある綏芬河まで脚を伸ばした。

一月二十日(土)

佳木斯。岩城村、茨城村の開拓地へ。大陸ホテル泊

一月二十一日(日)

九時〇分 佳木斯発。羅津行き一〇四号で追分へ

十時八分 追分着。少年義勇隊を訪問

十七時三分 追分発。勃利行き一四四号で弥栄村へ

十七時五十六分 弥栄着。月夜の弥栄村を歩く

「私は月夜の彌榮村をしばらく歩いてみた」

十八時〇分 彌榮発。佳木斯行き一〇三号で佳木斯

へ戻る(8)

十九時三十五分 佳木斯着



一九四〇年一月二十一日
夜六時の月。

一月二十二日(月) 佳木斯。大陸ホテル泊

一月二十三日(火)

九時〇分 佳木斯発。羅津行き一〇四号で牡丹江へ

二十時三十三分 牡丹江着。富士屋ホテル泊

一月二十四日(水) 牡丹江。富士屋ホテル泊

一月二十五日(木)

九時〇分 牡丹江発。綏芬河行き九〇一号で

綏芬河へ

十六時〇分 綏芬河着

芙美子の「凍れる大地」は、

時間を調べてみると、朝八時に綏芬河行きの列車がある
ので、それに乗ることにきめて早く床についた。(をばり)

と、ここで終わっている。(9)

綏芬河から日本へ

芙美子が、凍れる大地への旅から日本の福岡に着いたのは二月
二日であった。

『東京朝日新聞』昭和十五年二月五日に掲載された芙美子の寄
稿文「凍れる大地」大きく伸びる力 行く先々に見る心打つ
情景 満洲を旅して 林芙美子」を紹介する記事に、

林芙美子さんは、正月を迎へて間もない五日の急行で單身
渡満、零下三十度の厳冬に閉ざされた「凍れる大地」を視
察、約一月ぶりで二日夜福岡に歸着しました。以下は林さ
んの手記であります。―写真は林芙美子女史―

とある。芙美子の手記はこの二月五日と、二月十三日の「雄々し
い少年義勇隊 満洲を視察して 林芙美子」との二回に分けて掲
載された。この手記に大幅に手を加えたものが雑誌『新女苑』四
月号(昭和十五年)に掲載された「凍れる大地」である。

林芙美子が見た宝清^{ほうしん}

【宝清飛行場】

芙美子が降り立った飛行場は、宝清を囲む城壁の西門の外にあ
った。満州国の康德元年(一九三四年)に建設されたもので面積
は約十六、七ヘクタール。正方形に直せば一辺約四〇八メートル
の大きさである。軍用の他に民間の満州航空も利用して佳木斯と



宝清飛行場跡。現在は宝清明珠という住宅地となっている。2010年9月8日撮。

結んでいた。宝清は日本軍の要地で、芙美子が訪れた年の翌年（一九四一年）には更に大きな北飛行場が建設され、そのまた翌年（一九四二年）には北飛行場よりも更に大きな南飛行場が建設された。そのため、芙美子が降りた宝清飛行場は西飛行場と呼ばれる。『宝清県志』（10）



宝清県協和会本部跡。現在は宝清商業大廈。2010年9月9日撮。

【宝清県協和会本部】
 芙美子が協和会主催の座談会に出た時、立ち寄った「事務所」とは宝清県協和会本部の事であろう。『宝清県志』編纂主任の于畔海氏に協和会本部の位置を訊ねたところ、今の「宝清商業大廈」がそれに当ると教えてくれた。そこは宝清の街の中心部に位置し、道路を挟んで斜め向かいには、憲兵隊本部があった。その憲兵隊本部は、現在は郵便局となっていた。

【宝清の病院】

芙美子は「まだ寶清がこんなに整はない以前は、病人は醫者もなく死ぬのを待つてゐたと云ふ土地だつたさうだ」と、協和会主催の座談会で聞いた話を書いている。それを裏付ける様な記述が『宝清県志』にある。

一九三八年、日本が県立病院を建てた。当時、千人あたりの医師は〇、三人で、医師が少なく技術も低く、疫病が流行すると沢山の死者が出た。康德二年（一九三五年）に県境で伝染病が発生すると二百七十人の患者のうち百十六人が死亡した。死亡率は四十二%であった。（587頁）

西洋医学の医師は、一九二九年以来、張躍東医師が「大東医社」を開いており、一九四五年前後まで「協和薬店」「慈恵医院」「永善医院」があった。（589頁）

一九三八年、日本が宝清県病院を建てると日本人の岸本が院長となり、中国人の医師は追い出された。院内の看護婦は大部分が日本人で、内科、外科、小児科、婦人科があったが、主には日本軍と役人が医療の対象であった。（略）一九四一年に初めて外科手術が行われ虫垂炎の切除に成功した。これは宝清の医療史上大きな出来事であった。（592頁）

芙美子は、咽喉にリゴール液を塗ってもらい、傷病兵のために慰問の講演をした病院を「陸軍病院」と記しているが、右の『宝清県志』では「宝清県病院」としている。



陸軍病院（宝清県病院）跡。現在は宝清鎮医院。2010年9月7日撮。

【宝清の兵舎】

「飛行場の周囲にある小山の上には赤煉瓦の兵舎が點々と見えたと」芙美子が記した兵舎はどこにあったのか、そこは芙美子が泊った所であり、將校達と昼食をとった所でもある。それを于畔海氏に訊ねたところ、今の宝清県第一中学だと教えてくれた。行

ってみると、そこは芙美子が降りた飛行場から思ったほど遠くなく、高さも山と言うほど高くはない、なだらかな丘の上にあった。学校は、四階建てと五階建ての校舎が並ぶ大きな学校で、校門は施錠されていた。中国の学校はどこでも警備が厳重で余程の事がなければ入れないが、偽満期の兵舎跡を調べに来たと言うと、幸いにも中に入れてくれた。

中に入ると授業中の校舎はシンとして静かだったが、中を抜けて運動場に出ると、その運動場はまさしく兵舎の跡地で、よく見ると建物の基礎と思われるコンクリートと鉄の棒が残っていた。休憩時間になったのか、運動着的な制服を着た中学生が校舎から出てきて一気に騒がしくなった。近づいて来た一人の教員が、煙草に火を着けながらコンクリートの基礎をぼんぼんと靴で叩き、昔からこれはあります、と言った。兵舎は、今も宝清の人々の記憶に生きていたのだ。

芙美子が兵舎から見た風景は次の様なものであつたらう。

「兵舎から東の方に宝清の町が見下ろせ、城壁が見える。城門には兵士が立っているのが見える。城壁の西側には飛行場が見え、滑走路が城壁と平行に南北に伸びている。飛行場の隣には日本軍三九三部隊の本部があり、本部の前を東西に伸びる道路の街路樹が、兵舎の方に続いている。街路樹の向こうには司法部の建物が見える」

城壁に囲まれた宝清の西城外には、飛行場、病院、部隊、兵舎、司法部等、日本軍の施設が広がり、城壁の中には憲兵隊の本部、協和会の本部、郵便局がある。宝清の町はこの様な配置で構成さ

れていた。



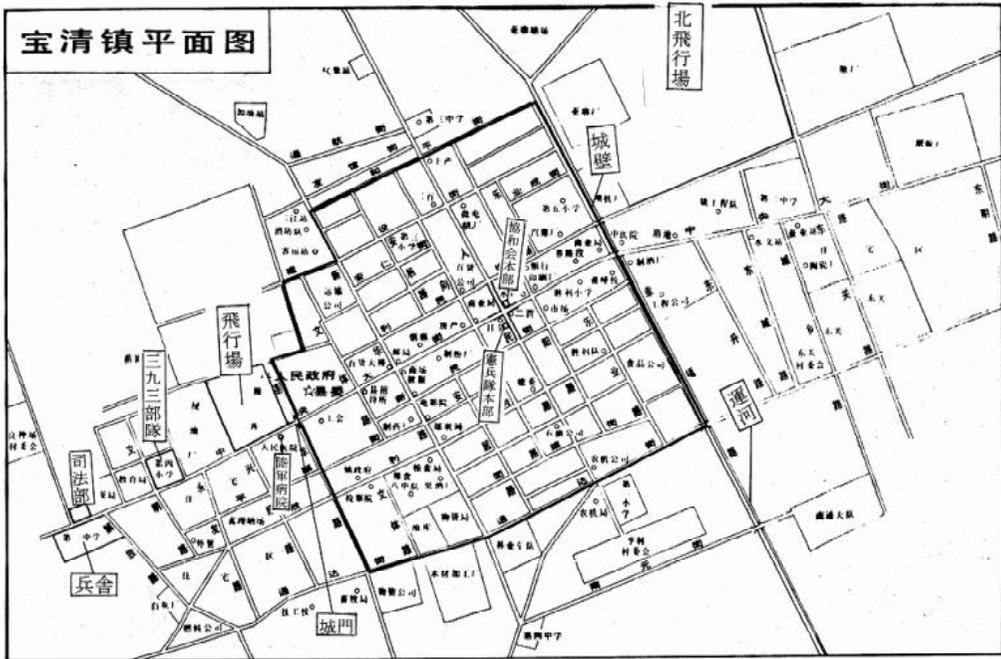
兵舎跡。現在は宝清県第一中学の運動場。右の建物は校舎。2010年9月8日撮。

【宝清鎮平面図】

宝清には町の地図が無かった。長距離バスの基点駅なら置いていると思つたがそこにも無く、地図無しの状態では位置を掴む事が難しかった。地方志辦公室で于畔海氏に地図の有無を尋ねたと

ころ、やはり無いと言う。地図そのものが発行されていない様だ
 った。だがこれなら有ると『宝清県志』を繰って見せられた古地
 図の様なものが役に立った。それがここに示した「宝清鎮平面
 図」である。いつの時代のものか注記がなく正確には分らないが、
 人民医院や微電機廠（マイコン工場）、加油站（ガソリンスタン
 ド）の名がある事からすると、出版年である一九九三年に近い頃
 の地図だと思われる。

この地図の上に、芙美子が訪れた一九四〇年当時の「兵舎」
 「司法局」「三九三部隊」「飛行場」「陸軍病院」「城門」「憲兵隊
 本部」「協和会本部」「城壁」「運河」「北飛行場」（一九四一年建
 設）の位置を書き加えた。芙美子の「凍れる大地」を読む上でこ
 の地図は参考になる。



兵舎の跡を見るために第一中学の運動場に立っていた時だった。初老の男性が笑顔を見せながら近づいて来た。学校の用務員らしき人で宝清の生れだと言う。丁度、宝清に詳しい市井の人を見つけたかと思っていたので、一九四〇年の頃の宝清について聞いてみた。するとやや濟まなさそうな表情をして、その時代の事は余り記憶がない、しかしその時代の事に詳しい老人達がいる、そこへ行けば話を聞けるだろう、と居る場所を教えてくれた。

【ばかやろう】

老人達が集まるのは決まって午後一時を過ぎてからで、場所は、校門を出て少し下った所にある街路樹の下だと聞き、午後一時まで待って街路樹の下へ行ってみると、そこには七、八人の老翁達がいた。そのうちの誰が当時の事に詳しいのか分らなかったが、まずは話し易そうな人をと、老翁達を見ながら近づくと、一人の老人が私に気付く「日本回来了！（リーベン フライラ）」と大きな声で言った。「日本が戻って来た」という意味だ。老人の眼は吊り上がっていた。

骨格が太い精悍な顔の老人だった。樹影の下が一気に緊張したのが分った。更に近づく私を指さして「ばかやろう！」と日本語で言った。この老人は当時の事を何か知っている。

傍に近づいて老人の横に坐ると、老翁達が周りを取り囲み、一つの輪が出来た。老翁達は何故私がここに来たのかを聞いた。私は林芙美子という作家が一九四〇年一月に宝清に来た事、その時

の協和会本部や、兵舎、城壁等の旧跡を調べている事を話した。その間に輪の緊張が少しづつ解れて来るのが分った。

「ばかやろう」と叫んだ老人が語った内容は次の通りである。偽満期の宝清では、良い食料を持ち、綺麗な衣料を着ている中国人は「経済犯」だった。私が十四歳の時、父が私の兄二人を連れて道を歩いていると、一人の憲兵に捕まり、



父の死を語る老人

憲兵隊の監獄に三日間入れられた。三日後に家に帰って来たが、父は間もなく死んだ。五十歳だった。何故憲兵に捕まったかと言えば、その時、父は白い包子（パオズ。中華饅頭）を重ねたお盆を両手に持っていた。その包子が経済犯と見なされた。私の母はその時既に死んでいて、父は母の墓に供えるために包子を作り、それを持って墓参りに行く途中だった。父が死んだのは監獄のせいなのか、それともその時風邪を引いていたせいなのか分らない。だが、私は日本を憎んでいる。「我恨日本！（ウヲ ヘンリーベン）」

老人は一九二八年生れの八十二歳だった。父の死は、一九四二年の事になる。一九四二年は、日本が一九四一年の北飛行場に続いて三つ目の南飛行場を宝清に造った年である。別の老翁によると

日本は宝清の事を「大大哈爾濱、小小宝清」と称したくらい、哈爾濱に次いで宝清を重要視していたと言う。又別の老翁は、この時代は中国人から言えば「人間地獄」で、自分たちの生活は「暗無天日」（正義も道理もない暗黒社会）の日々だった、と言った。又別の老翁は、日本は「経済犯」を厳しく取り締まったが、日本人は平民の家から食料を奪って、そのために餓死した中国人が沢山いた、と言った。また、別の老翁は、日本人はいつも「ばかやろう。ばかやろう」と怒鳴った、だからこの言葉を覚えているのだと言った。

老翁達が次々に話をしていている時、先程の精悍な老人が突然、「五十一字を知っている」と言い、日本語で「あいうえお、かきくけこ、さしすせそ」と言い出した。そして、私達は学校で六年間日本語を教えられた、日本人の先生には反戦の考えを持つ人がいた、その先生は「はとめ先生」だった（はっとり先生か）、と語り、次第に当時学んだ日本語を思い出して来た様であった。続けて「いち、に、さん、し、ご、ろく、しち」と言い、指で自分の頭を指して「あたま」、口を指して「くち」、鼻を指して「はな」と言い、「て」「みみ」「あし」「くつ」に及んだ。そして、「おかあさん」と言い、「わたくしは」と言った。

他の老翁は自分の父が見た事を語った。——日本が負けた後、宝清の町を馬を引いて通る日本人がいた。馬には老婆が乗り、若い男が引いていた。二人が大きな声で何かを言い合ったかと思うと、若い男が老婆を馬から引きずり降ろし、男は馬に跨って去って行った。泣きながら立ち尽くす老婆は、盲人だった。それが親

子だったのかどうかは分らない。言い合う言葉は日本語だった。——と語り、それくらい日本人の心は荒んでいた、と憐れみの表情を見せた。

また、他の老翁は日本の開拓団の事を話した。——宝清に来た開拓団は琉球から来た団員が多かった。自分達中国人は彼らを「小琉球（シアオリユチュ）」と呼んだ。日本が負けて宝清から退却する時、多くの日本人が殺されて酷い目にあつた。特に女性と子供が害を受けた。琉球からの開拓団員の中には、自分で首を吊って自殺する人がいた。街路樹の枝に何人も人が首を吊ってぶら下がっているのを見た ——

老翁達の年齢は八十歳から八十四歳であつた。何かを知っているどころか、何でも見て知っている人達だった。互いの話を聞きながら次から次へと記憶が蘇って来たのだ。

今、八十歳代の人は貴重な人材であると言える。世界中の八十歳代は、今や薄れて行く運命にある歴史の中を生きて来た。消えゆく歴史を如実に語る事が出来る。現在私達は、彼等の話を聞けるか、もう聞けなくなるかの瀬戸際に立っている。

【『宝清県志』が伝える日本】

宝清の日本軍は三九三部隊で、今の第四小学校に本部があつたと教えてくれたのは、老翁達であつた。老翁達はまた芙美子が降りた民用飛行場は今の宝清明珠区だとも教えてくれた。彼等は『宝清県志』にも記載されていない事を教えてくれたことになる。一方、『宝清県志』には彼等が語った事を裏付ける記載がある。

〈三九三部隊〉

三九三部隊：康德八年（一九四一年）、太平洋戦争の勃発後、宝清の守備隊は三九三部隊になった。旅団には騎兵、自動車、戦車、砲兵等の部隊があり、総数約五百名であった。

〈憲兵隊〉

日本憲兵隊宝清分隊：康德四年（一九三七年）設立。隊長代理は前田曹長。下に特高部、庶務部があり、特高部長は大山曹長、庶務部長は房内軍曹。特高部の下に、戦務や外勤等を尋問する班を設け、庶務部の下には、文書、会計、人事の班があった。

〈開拓団〉

日本開拓民団武装：宝清は日本侵略者が東北方面に展開する移民計画の重点地区であった。康德元年（一九三四年）一月、宝清県の民間の土地を没収し、ほぼ八〇%の耕作可能地を取り上げた。康德八年（一九四一年）から一九四五年までの間に、宝清全県に侵入した日本人武装開拓団は二十三（その内集団移民団十三、義勇隊移民団十）、報国農場は六で、在籍人数は総計六千七百四十九人を数え、軽機銃や三八歩兵銃、手榴弾で武装し、宝清人民を苦難のどん底に陥れた。（181頁）

また宝清県に近い集賢県の県志には次の様な記載がある。

〈日本による開拓団員大虐殺〉

日本侵略者は中国人民に残酷な行為をしたのみならず、日本人民に対しても軍国主義的に振舞った。一九四五年八月、

日本が投降して撤退が始まった時、開拓団の武装分子は、開拓団の日本移民千六百余人を二十棟の倉庫に閉じ込めてガソリンに点火し、外では機関銃を掃射して手榴弾を爆発させ、生きたまま焼死、爆死させた。生存者は僅かであった。（黒龍江省集賢県志編纂委員会編『集賢県志』一九八五年刊 573頁）

この様なおぞましい内容の記載もある。

芙美子と戦争

芙美子は戦争と向き合って凍れる大地を旅した。新聞記者には「日程など全くもたず勝手気ままに歩く積りで」と語り、「凍れる大地」には、「この旅立ちにはあわただしい計画であつて、満洲行きについては、何一つ、私はスケジュールをつくらなかつた。一冊の案内書も持たなければ、誰彼への紹介状も持たない」と書いているが、実際には安東で八木元八に会い、行く先々で朝日新聞の世話を受け、また出発前には鈴木庫三少佐から「文士林芙美子女史が満州を訪れると云ふので私が陸軍報道部にゐるころ渡満後に於ける便宜を与へて青少年義勇軍に関することも少し原稿に書いてもらいたいと思つて満拓の喜田一雄氏などにも紹介したことがあつた」（11）という便宜を受けていた。

気ままに旅をしたのではなく、周到に準備をして真正面から戦争を見てきたのである。では芙美子は、南京、漢口、満州、ジャワ、ボルネオ等の戦地を見て何を考え、何を伝えたかったのか。

それは、林芙美子が終戦後の昭和二十一年七月から十一月まで雑誌『紺青』に発表した小説「作家の手帳」に表れている。「作家の手帳」には、凍れる大地を旅した後、何を感じ、何を考えたかが書かれている。

かつての、日本の満洲開拓の事業を考へてみますと、何だかぞつとするほどの寒氣を感じないではゐられません。耕地もなければ、道すらもない、しかも家もない荒涼とした寒い土地々々へ無雑作に人間を送り、その開拓民たちが、まづ、住む家をつくり、それから耕作して、何年目かにトラックの道をつけるのです。何の思ひやりもなく裸身のままの人間を送りこんで、長い間かかつて、やつとどうにかなった時にこの敗戦なのです。政府が、満洲の開拓民の人々にどれだけの責任を負ふのでせうか。日本での土地を手放して、意氣に燃えて渡滿して行つた人々が、今度はまた裸で戻つて來なければなりません。そのひと達の土地はもう故郷にはないのです。

これは、まさしく芙美子が訪れた宝清、佳木斯、牡丹江の事を言っている。だが、凍れる大地で懸命に生きる同胞を見て、書きたくてもその時は書けなかった。時代が許さなかったのだ。しかし、今は書ける。だから書いて置かねばならない。芙美子は真正面から政府を批判している。

そして戒めは自分にも向けられる。

希望や憧憬を見すてゝゝゝゝゝ長い戦争を、戦争が終つたらといつて、すぐけろりと忘れてしまふといふことはあり

得てはならないのです。

どんなことがあつても、一應はすべての人達の胸に、この悲劇を胸に焼きつけて、けんそんな気持ちで、天にひれ伏さなければ、また再び、虚偽の渦の中にまきこまれて、私達は怖ろしい苦役の底に沈んでゆかなければならない時代が來ると思ひます。

宝清の老翁達は私の前で怒り、悲しみ、憐れみ、そして平和な今に心から笑顔を見せた。彼らは、戦争がいかに悲惨で非道なものを、私に話して聞かせた。それを、芙美子は願っていた。

五十年位もたつて、いま生きてゐるすべての私達が土の下にはいつてしまつた頃、未來の子供たちは、兵隊のゐない私達の國を不思議に思ふことでせう。その時にこそ、こんどの長い戦争がどんなに悲劇で苦しかったといふ話を長老はしてきかせなければならぬでせう。

芙美子は五十年後を心配してこう書いたが、その願いは七十年後の宝清で、中国人の長老によつて叶えられた。まるで私が宝清に行く事を、予言していたかの様に思える。私は芙美子のためにも、未來の子供たちに向かつて伝えなければならぬと思う。

あとがき

宝清は遠かった。哈爾濱から列車に乗つて佳木斯まで七時間かかり、佳木斯では芙美子と同じ様に二泊した。佳木斯からは鉄道が無く、満員のバスに揺られる事四時間で宝清に着いた。着いた

時は、駅舎に掲げられた「宝清」の文字を見て、遂にここまで来たか、と思った。宝清は今でも辺境の地である。それは街を歩けば判る。まるで一九七〇年代の中国の様に、人民政府の建物が偉観を誇り、夜の街は光が少なく真っ暗に感じる。夕食に小籠包を食べに入ると、満腹して四元（五十二円）で済む。経営する若い夫婦は、上海から宝清に移り住んだ理由を、後れた町だから上海で蓄えた資金が生きる、と言う。街を歩きながら、こんな辺地によくぞ芙美子は来たものだと、何度も思った。

宝清へは人の協力なくしては行けなかった。また本稿も人の助言なくしては成らなかつた。それをここに記しておきたい。哈尔滨に行くに当っては、北京魯迅博物館の黄喬生副館長と中国人民大学文学院の孫郁院長の力添えが無ければ叶わなかつた。哈尔滨では、黒龍江省社会科学院の趙玉貴社長と王敬荣教授、学习与探索雜誌社の温麗娟氏から、佳木斯で調査すべき機関を教示された。佳木斯では、佳木斯市地方志辦公室の楊萍主任と、北方佳賓酒業（汾酒廠）の宋金和副經理に会い、宋金和氏が蒐集所蔵する偽滿期の日本軍の貴重な実物資料を見る事が出来た。そこには軍刀、軍服、勳章から命令文書、書簡、新聞、雜誌に至るまで膨大な資料があつた。宝清では、宝清県地方志辦公室の于畔海主任が、自ら『宝清県志』を繰って、将校、協和会等の関連記述を示してくれた。かくも多くの人物と会う事が出来たのは、偏に福山大学人間文化学部研究生として在籍し、出版文化を研究する張勝氏の尽力による。ここに記して謝意を表したい。

芙美子の「凍れる大地」が、中公文庫の『戦地』に収められて

いる事、その初出は雑誌『新女苑』である事、雑誌掲載時に検閲があつた事については、林芙美子記念館ボランティアガイドの浦野利喜子氏より教えて戴いた。また林福江氏からは、芙美子所蔵の銀製腕輪の背景を調査する上で必要となる資料を提供して戴いた。併せてここに記して謝意を表したい。

（本稿は、平成二十一年度学術振興会科学研究費補助金、基盤研究（C）による研究成果の一部である）

注

（1）「凍れる大地」。芙美子が一九四〇年一月に満州を回った時の旅行記。中公文庫『戦線』（中央公論新社二〇〇六年七月二十五日発行）に収められている。初出は実業之日本社昭和十五年四月一日発行の『新女苑』四月特別号、二九〇頁〜三四一頁。

（2）『林芙美子全集』第十六卷文泉堂出版（昭和五十二年四月二十日発行、292頁）は、林芙美子が「放浪記」の印税で満洲、上海に出発したのは、「八月中旬」としている。

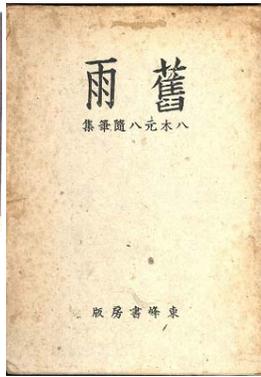
（3）『満洲支那汽車時間表』（昭和十五年八月一日発行）は、『満洲朝鮮復刻時刻表 附台湾・樺太復刻時刻表』（新潮社二〇〇九年十一月二十日発行）に拠る。

（4）満洲日日新聞社発行の日本語新聞。本社は奉天。康徳七年（昭和十五年）一月七日第七面。国立国会図書館東京本館所蔵。

(5) 『滿洲日日新聞』 康德七年（昭和十五年）一月九日夕刊第二面。

(6) 「昭和三年の夏から秋にかけて」と芙美子は記すが、実際には昭和五年の事である。続く筆で「あれから十年たった現在も」と記している事からも、これを書いた年の昭和十五年から十年前は昭和五年である事が判る。

(7) 八木元八著『隨筆 舊雨』東峰書房、昭和十六年五月十一日發行。この書は、芙美子が編集と装幀の一切を引き受けたもので、別刷りで芙美子の推薦文も挟んでいる。八木の自序には「この隨筆の新聞切抜



八木元八

きが、雑然として集め保存されたあつたものが、たまたま林芙美子 女史の目にとまり、本に纏めるやう 慫慂され、造本印刷等一切の面

倒は女史が見て下さると云ふのでお寄せした次第である」と書かれている。

(8) 佳木斯周辺の追分と弥栄村を列車を利用して訪ねた芙美子は、月夜の弥栄村を歩いた時の事を「歩いていると、齒の根が震へるほど寒いので驛へ歸つた。佳木斯行の汽車の来るまでは、まだ二三十分あると云ふので、私達は驛長室で汽車を待たして貰つた」と書いている。この日の列車の運

行が『滿時表』の時刻通りであるなら、弥栄村での滞在時間は、十七時五十六分から十八時0分までの六分間しかなく、驛長室で二三十分待つたと記す芙美子の記述と合わない。恐らくこの日の佳木斯行き103号は『滿時表』の時刻より遅れて運行したのであろう。

(9) 綏芬河行き 901 号列車は、九時0分発だが、牡丹江駅には八時二十五分に到着する。だから芙美子は「朝八時に綏芬河行きの列車がある」と書いたのであろう。

(10) 宝清県地方志編纂委員会編『宝清県志』一九九三年刊。全七三八頁に及ぶこの地方志は、偽滿時代の資料を詳細に載せている。現在の編纂室主任は于畔海氏。『宝清年鑑』をも編纂する宝清県地方志辦公室（史志辦）は、黒竜江省の「先進集体」と褒賞されている。なお『宝清県志』はウエブ上で公開されていて「中国龍志」から「宝清県志」に入れば何時でも閲覧する事ができる。

(11) 佐藤卓己著『言論統制 情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』中公新書 354 頁

Fumiko Hayashi and the Frozen Earth :
A Journey to *Baoqing* of *Manchuria*

KUBO Takuya

Fumiko Hayashi energetically visited more than seven towns in the frigid Manchuria by railway and airplane in January 1940, the 7th year of the Kangde era. At that time in the area Japanese army divisions, provost guards and pioneer teams existed.

In this article I would like to clarify her itinerary and report what I knew about it when I visited Baoqing in September 2010.

Keywords: Fumiko Hayashi, Baoqing, Kyowa-kai, FrozenEarth, TokyoAsahi Shinbun, Manchurian Daily News, Lu Xun